

例會記事

大正七年十一月九日午後一時半より本校第一教室に於て例會を開く。本日の講演は次の如し。

○コホロギの觀察と實驗

理二・四 磯貝 フサ
吉岡 ミフミ

○インキにつきて

理一・四 中村 せつ
下村 つる
小川 輝

○蠅につきて

理二・四 及川 みつ
向井 琴柱

此の外岩川教授の黃色のおほなめくじに就ての講話及び保井助教授の米國に於て蠅に對する感想の御話あり。

大正八年二月十五日午後一時半より本校講堂に於て第三學期の例會を開く。本日の講演は次の如し。

○印刷術の一班につきて

理一・四 山口 よた
柳深谷 菊重

○硬化油につきて

理一・三 柿久田 ヒロ
弊吹 智子

○スーザンIIIと白鼠

理二・四 磯貝 フサ
片田 ハルノ
會澤 キヌ

講話

黃色のおほなめくじに就て

岩川友太郎

昨大正七年八月帝室博物館へ出勤せる折柄同館歴史部員にして下谷區三の輪邊に住める某氏が一種の蛤蝓若干を吾人の天產部へ持參し。この蛤蝓は毎夜室内へはひ込み困る奴だといひ居れり。これを檢したるに在來の普通種とは全く違ひ黃色で頗る大きく且つ背上に貝殻を負ふて居る。

兎に角珍種と認めたからこれを飼つて同定する傍ら其の習性をも調べ見んものと。其の中二疋を貰ひ瓶に入れて金巾で口を封じ。其の晩は自宅の流し下の涼しい所に置き翌朝學校へ持參せんとせしに。圖らずも一疋は金巾の布目を喰ひ破つて逃げ出せり。依て博物館の人にも所望し置き又宅の子供と下婢に逃げ出せる蛤蝓が復び現はれ出でんも計り難ければ能く注意せよと言ひ「付けおけり。然るに數日にして流し下に子供は二疋を捕へたり。失ひたるものは唯一疋なりしに二疋を獲たるより考ふれば自宅近傍にも同種の蛤蝓が慥に棲息するものと察せられた。果せる哉其の後は自宅にて數疋を捕獲し博物館の方からも供給されたからして材料は豊富と成りました。

所が其の飼方に就て余輩の失策談を茲に自白する。如何にも盛夏の時ゆへ大なる硝子鉢へ濕土を盛り傍らに小水盤を置いて水分を絶やさぬようにし食物としては毎朝